

日本中小企業学会第43回全国大会報告 －科学技術の進展と中小企業：現状と研究の射程－

文 能 照 之

(近畿大学経営学部教授
近畿大学経営イノベーション研究所長)

日本中小企業学会第43回全国大会が2023年9月30日(土)、10月1日(日)の両日にわたり、近畿大学東大阪キャンパスにて開催された。またこれに先立ち前日の29日には、プレイベントとして日本地域経済学会と日本中小企業学会との共催シンポジウムが開催され、前者所属の遠藤貴美子氏(敬愛大学)が「東京都墨田区における新たなものづくりの拠点」、後者所属の町田光弘氏(大阪産業経済リサーチ&デザインセンター)が「中小企業の視点からみた産業集積－集積の範囲とメリット－」をテーマに研究報告が行われた。筆者は第43回大会準備委員長を拝命し、大会開催の準備と運営を担当したことから、今回報告された研究内容や議論の様子などを取り纏め、中小企業を対象とする研究者や支援者の皆様と情報を共有させていただきたい。

まず今大会の特徴の一つは、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類から5類へと変更されたことにより、3年ぶりに制限を設けることなく対面開催され、懇親会も行われたことである。このことは新型コロナ禍以前の状態に戻っただけのことかもしれないが、対面での研究報告・討論や会員相互の意見交換、懇親会での親睦などを通して、会員が求めるものの獲得やWeb開催では得ることのできない関係性の構築が図られたように思われる。

今一つは、統一論壇のテーマを「科学技術の進展と中小企業－現状と研究の射程」とし、登壇者に工学系の研究者並びに企業経営者をお迎えしたことである。昨年の第42回大会で指摘されたように、中小企業研究者という会員が有する視点に限定せず、異なる考えをもつ者からの学びを得ることで、多様性のある、学際的な研究への歩みが進められたように考えている。

以下では、具体的なプログラムの内容・研究報告等について紹介したい。

今回の自由論題は、大会初日に①科学技術と中小企業、②中小企業経営、③中小企業支援、④地域・社会と中小企業の4つの分科会に分かれ12グループの研究報告が行われた。報告数は例年より少なく、新型コロナウイルスの影響が残っていた前回の6分科会、14報告に及ばず、大会の1日目でセッションを終えることになったのは、やや寂しい感があった。具体的な報告は以下に示すとおりで、経営資源の脆弱な中小企業が成長・発展を遂げるために必要とされる要因について、ICTにみられる技術、外部組織との連携や外部環境への適応など諸点からの報告がみられた。

①科学技術と中小企業の分科会

- (1) 竹下智氏(安田女子大学)「中小IT企業のICT人材が支える自治体DX－自治体と外部ICT人材との協業モデル－」
- (2) 文能照之(近畿大学)・峰滝和典氏(近畿大学)「中小・中堅企業のイノベーションとDXの進展可能性に関する実証的考察」
- (3) 深沼光氏(日本政策金融公庫総合研究所)、原澤大地氏(日本政策金融公庫総合研究所)「温室効果ガス削減をサポートする中小企業の現状と課題」

②中小企業経営の分科会

- (1) 米倉穰氏(滋賀大学・院)「中小企業の海外子会社撤退に関する理論的実証的研究－「資源ベース論」を基軸にして－」
- (2) 林尚志氏(南山大学)「海外子会社が継続的な高度化を実現するプロセスの考察：日系中小メーカー2社の中国子会社の事例から」

- (3) 海野晋悟氏(香川大学)「中小企業経営者の労働時間の配分と経営パフォーマンス」

③中小企業支援の分科会

- (1) 小椋俊秀氏(㈱シンクシステムズ)「中小企業家同友会の経営指針による組織変革に関する事例研究：従業員の变化に着目して」
- (2) 村山賢志氏(埼玉県よろず支援拠点)「中小企業等の経営支援における課題と解決の方向性～よろず支援拠点、小規模企業白書の調査結果を参考に～」
- (3) 清水稔文氏(関西学院大学・院)「地方におけるビジネス・エンジェルネットワーク(BAN)の形成～遠距離投資と投資先選定基準の分析～」
- ④地域・社会と中小企業の分科会
- (1) 瓶内栄作氏(芸術文化観光専門職大学)・津田泰行氏(兵庫県中小企業家同友会)「都市企業の地域への多拠点展開における、地域内ハブ企業の役割についての考察」
- (2) 林松国氏(小樽商科大学)「旭川家具産地における新規創業企業の成長とその意義」
- (3) 山地理恵氏(昭和女子大学)「子ども服の安全JIS規格制定活動－社会課題解決と経済成長の両立を目指す中小企業戦略の可能性－」

自由論題報告に引き続き午後には、信金中央金庫地域・中小企業研究所様のご協賛を得て、国際交流セッションが行われた。セッションの冒頭で同研究所所長の野英明氏が挨拶をされた後、基調講演とパネルディスカッションが行われた。基調講演には2名の研究者をお招きした。お一人は、韓国延世大学校教授・韓国中小企業学会元会長の李志満氏で、今お一人は立命館大学の竇少杰氏である。

李氏のご講演題目は、「Human Resource Management in Family Business」で、韓国語でのご講演を就実大学の洪奉性氏の通訳により拝聴した。また、竇氏のテーマは、日本の老舗企業における家族経営と後継者育成であった。

ご講演後のパネルディスカッションでは、講演者のお二人をパネリストにお迎えし、「ファミリービジネスと老舗企業」をテーマにパネルディスカッションが開催された。コーディネーターは、同志社大学の関智宏氏が務められ、日韓のファミリービジネスの共通性と異質性についての議論が行われた。

大会2日目の統一論題報告では、東京大学の伊藤重聖氏が「中小企業によるアジアDX市場の開拓～国際化とデジタル化の壁をいかに越えるか～」、兵庫県立大学の藤川健氏が「日本の分業システムと技術の変容」をテーマに報告された。その後、森脇俊道氏(神戸大学名誉教授、摂南大学名誉教授)が「ものづくりにおける技能と技術について」、藤原義春氏(㈱藤原電子工業 代表取締役会長)が「アナログ技術がDX技術を支える－時代の変化に対応し生き続ける中小企業を目指す!」をテーマに報告された。そして、4名の方の報告後にはパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションは、お二人の座長、池田潔氏(大阪商業大学)、岡田浩一氏(明治大学)の進行により、上記4名の報告者のほか、会員報告に対する討論者を務められた西岡正氏(立命館大学)、高橋美樹氏(慶応義塾大学)がパネリストに加わり行われた。科学技術の進化がイノベーション創出による経済発展をもたらすことから、ICTやAIという情報技術を有効活用するとともに、それらを生かすためにも職人が有するアナログ的な技能を継承・発展させていくことの重要性が議論された。

最後に、筆者が閉会の挨拶を行い、2日に間にわたって開催された第43回全国大会は成功裏に幕を閉じることができた。本大会を無事に終えることができたのは、開催校として近畿大学の関係者の協力、並びに大会準備委員の関智宏氏(同志社大学)、瓶内栄作氏(芸術文化観光専門職大学)、木下和紗氏(摂南大学)のほか、開催校所属の筒井万理子氏、井戸田博樹氏、井出文紀氏、峰滝和典氏のご尽力のお蔭である。この場をお借りして御礼申し上げる次第である。有難うございました。